

# 特集 官立弘前高等学校資料について

## 官立弘前高等学校資料の整理について

官立弘前高等学校資料整理作業チーム

官立弘前高等学校資料は、平成 20 年（2008）において、弘前大学に分散して保存・保管されていた。このたび、整理・調査の対象とした資料は、附属図書館と人文学部に保存・保管されてきた紙媒体を主体とするものであって、遺物・遺品を取り扱うことはしなかった。

附属図書館の資料類は、官立弘前高等学校（以下、弘高と略記）の学校財政に関わる帳簿類であり、もう一つは、新館 3 階旧制弘高スペースにあるキャビネット並びに展示ケースに納められていたオリジナルの資料類である。

人文学部の耐火金庫に収納されていたのは、文部省通達書類等、教務日誌、学籍簿、退・除籍者等、調査表、成績原簿、生徒名簿等、関係書類綴、卒業生関係書類綴、入学証書綴等であった。

平成 20 年、遠藤学長から長谷川附属図書館長に弘高資料の整理に関する要請があつて、同年 7 月 29 日、官立弘前高等学校資料整理作業チームを立ち上げた。整理作業は、長谷川館長を中心として、資料の整理をするチームと、作業を支えるロジスティック班に分かれて実施した。附属図書館新館 3 階で実施した整理作業は、7 月末から 8 月 26 日まで酷暑のなか進められ、各資料を一点ずつ中性紙の封筒



人文学部の耐火金庫より搬出

に入れて、内容の確認と摘記、調査を行った。その結果、総数で 1,055 点の資料を確認し、その後、長谷川館長が項目を立てて資料の分類を行い、小石川職員が資料名と内容摘記のカードを入力して目録化した。10 月には、仮目録が完成し、内容の確認と精査を経て、正式な名称を「官立弘前高等学校資料目録」と命名した。なお、長谷川館長が館内の貴重書類に弘高関係資料が残存しているかどうかを調査した過程で、「津軽領元禄国絵図写」を発見したことを付け加えておく。

平成 21 年（2009）2 月 19 日、官立弘前高等学校資料整理作業チームは、弘前大学事務局 3 階大会議室にて、弘前大学表彰を受け、遠藤学長から労いの言葉をいただいた。現在、当資料

目録は、弘前大学出版会から刊行するべく準備中である。3月末、附属図書館新館3階に自動消火設備を備えた「貴重資料保管室」が完成し、貴重資料に指定された「官立弘前高等学校資料」は、同室に保存されることになった。



遠藤正彦学長（前列中央）、三浦康久社会連携・情報担当理事（前列右から二人目）及び長谷川成一館長（前列左から二人目）他受賞した官立弘前高等学校資料整理作業チーム

## 近代日本の高等教育制度が明らかに！ ～大変貴重な官立弘前高等学校資料～

青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ 主査 中園 裕



長い間眠り続けてきた資料が突如目の前に現れた。弘前大学附属図書館に所蔵されていた官立弘前高等学校（以下、弘高と略記）に関する膨大な資料群のことである。弘前大学の前身ともいえる弘高は、大正11年（1921）に開校し、戦後の学制改革によって廃止されるまで、30年近く存続していた学校である。

今日の学校制度を知る人たちにとって、官立高校といってもなじみがないだろう。同じ高校でも与えられた役割が全く異なるからである。現在の高校は地域に密着した学校といえよう。これに対し官立高校は、近代国家が地域からの人材発掘を意図して設置した学校であった。弘前市に設置され、同市民が誇りとしていた弘高も、本質的には国家のための学校という側面をもっていたのである。

本資料群は、1. 文部省からの通達文書 2. 沿革関係書類 3. 教員関係書類 4. 学生

関係調書 5. 雑誌類 6. 経理関係書類 7. 写真類 の7分野に大別できる。弘高の運営全般に関する総合的な学校文書とってよいだろう。総点数は1055点にも及ぶ。その分量に驚くが、年次ごとに資料が継続的に揃っており、そのことが歴史資料としての価値を高めている。また全国的観点から見ても、体系的に官立高校の運営資料が揃っている事例は非常に少ない。

文部省からの通達文書は、官立高校に対する経営指導や教育方針などを記した文書で、最も歴史的価値の高い資料群である。通達文書は大正9年(1920)の弘高創立から、昭和25年(1950)の閉校に至るまで、ほぼ全時代にわたって揃っている。文部省の高等教育政策に関する運用実態が、十数冊の簿冊で概観できるのだから、これほど魅力的な資料群はないと思う。

これに対して、教務日誌や学生に関する調書をはじめ、校友会雑誌や同窓会会報、名簿やノート・教科書などは、教師の活動や学生の生活に関する資料として重要である。当時の学生の心理や生活ぶりがわかるので、多種多様な分野で活用できると思う。これらの調書類を丹念に読み解いていけば、弘高(その背後に国家)が地域に求めたエリート発掘の実態を明らかにできるだろう。写真帖や卒業アルバムも、当時の教員や学生の顔ぶれだけでなく、弘前市の街並みなどが確認できるので貴重である。

こうして見ると、本資料群は単なる弘高の運営資料という枠組みを超えていよう。その質と量において、近代日本の高等教育制度を概観できる価値があるといつてよい。弘前大学の附属図書館から発掘され目録まで作られたことは、同大学にとって大きな朗報である。弘前市民ないし青森県民にとっては、大きな財産になるだろう。

情報公開制度の定着により、公文書の研究が進む一方、大学文書館を設置する大学も出てきた。今や大学所蔵の資料は、様々な学問分野の研究材料として、地域の利益に大きく寄与する状況になりつつある。もちろん大学文書館や大学自体の地域貢献は、まだまだ緒に就いたばかり。弘高資料集の公開と活用は、こうした傾向の先端を行く試みになると思う。

(なかぞの ひろし)

# 官立弘前高等学校資料に 秘められていた太宰治

人文学部准教授 山口 徹



左の写真は、この四月十五日に弘前大学附属図書館で行なわれた記者発表後、各報道機関を通じ全国に配信され、いまなお話題を呼んでいるものである。この清新な印象の、微笑をたたえて前方を見据える青年津島修治が、あの<sup>たいとうき</sup>類唐的イメージの代表格太宰治となるのかという驚きと、その逆に、太宰文学の根底にはやはりこのように純朴でひたむきな真面目さ、純粹さがあったのだという感慨をもたれた方も少なからずおられることと思う。

本年は太宰生誕百年ということで、複数の作品が映画化されたり、ゆかりある山梨や青森の文学館で大規模な特別展が行なわれたり、続々と関連商品も登場するなど、活況を呈している。折りしも本校の創立六〇周年にあたる今年、前身、旧制弘高卒業生であった太宰の未公開写真の調査・公開に該当領域の研究者として携わることができたのは望外の喜びである。

太宰治ほど作品と実生活の関わりとが取沙汰され、私生活の細部にいたるまで調べられてきた作家もいないため、調査・確認には覚悟をしたが予想をはるかに上回る時間と慎重さを要した。それまで本学の複数個所に分散して保管されていた官立弘高時代の<sup>ほうだい</sup>龐大な資料が、このたび附属図書館にまとめて収蔵・整理されることになったのだが、その資料の山に文字通り埋もれながらこの証明写真に残されていた二つの数字の謎（太宰左肩上・写真右側に緑スタンプで16、写真左下角に銀の手書きで14）について<sup>はくそう</sup>博搜した。このほか、官立高校時代の資料に秘められていた新事実など、関連資料を精査した結果については附属図書館編『官立弘前高等学校資料目録』（六月刊行予定）収録の拙論に記したので、興味のあるかたは御一覽願いたい。太宰文学の実質的な母体と目されてきた高校時代の、学校側の内部資料から今後どのように新たな太宰像が生まれてくるか、楽しみなところである。

（やまぐち とおる）